
リトルバスターズ×CLANNAD

鈴仙R

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ×CLANNAD

【Zコード】

Z6262Z

【作者名】

鈴仙R

【あらすじ】

交わるはずのない二つの世界が今交わる

第1章（前書き）

「恭介！…恭介！…いるんでしょ！…？」

「なんだ理樹朝っぱらから…って何だあ！…？」

いつも見慣れたはずの廊下それはそこにはなかつた
「ここも新しい世界なの！？」

「それにしては安定しすぎてこる…どうなつてんだこいつや…」

「朝からいぢやじぢやとつるさこねえ…一体なんだよ…」

振り向くと見慣れない生徒…金髪で結構童顔に近い顔

「ん~見ない顔だね…転校生？」

「え？ いやちが…」

「そうだ転校したばかりなんだ」

理樹の言葉を遮り恭介が言った

「ふ~ん…ああそうそう僕は春原陽平って言つてんだよひつくな~」

「棗恭介だ」

「直枝理樹です」

「棗に直枝ね〇〇〇〇じや、僕はもつ一眠りするからね~」

何が起きたんだろう僕たちの身に…

そうして少ししてから僕たちは鈴、謙吾、真人

元祖リトルバスターズと合流した

「ん?なんだ?いつもより人が少ない気がするな?」

「そうですね朋也くん」

「な、渚!?お前なんでここに?」

「朝自分のクラスにいたらあなたは違うクラスでしょって言われて、名簿を見たら朋也くんと同じクラスで…」

「なんなんだ…一体…」

「それに…ほら…」

「杏!?ことみ!?」

「みんな同じクラスになつてます…」

「朋也くん…なにがあつたのでしょうか?」

「んなこと俺に言われても」

「一体何が起きたって言つんだ?」

「おはよー」

「ん?春原か…」

「おはよー岡崎、渚ちゃんに杏、ことみちゃんも」

「春原、今の状況を見てなにも不自然におもわないのか?」

「何が不自然なのさ?」

「ことみや杏、渚までもが同じクラスなんだ」

「なにいつてんの?そんなのもとからじやん」

俺は春原が何を言つているのかまるで理解できなかつた、渚たちがもとから同じクラス?

そんなバカな…

現に渚はクラスを間違え注意をつけた、俺と渚以外の記憶が改变されたのか?

鈴「で、なんでこいつなったんだ?」

真人「まあこれはこれでいいんじゃない?」

謙吾「もつと深刻な問題だぞ」

恭介「まあ俺としては新鮮な感じでいいと思うがな」

なんでこんなことに、僕たちは今3年生の教室にいる

恭介はともかく僕たち2年がここにいることに異変を感じる

とにかく各自自己紹介をして席につく。

奇跡的にみんな席が近くでよかつた

授業は壊滅的だった。真人を見ると、真人は白くなっていた
とにかく自主勉が大変そうだな

できれば、早めに僕たちの世界に戻りたいな

なんだか大勢の転校生が来たな…

見覚えのない制服だな県外からか?そんなこと考えていたらいつの
まにか授業は終わっていた

朋也「じゃ部室にいくか?」

渚「そうですね…部室にいきましょう」

二人で部室に…つてみんな同じクラスだからみんなを呼んでからい
くか

春原「おいおい…これはどういうことだ?」

一足先に来ていた春原が驚いていた

朋也「どうした春原…つておい…マジかよ…」

杏「部室がなくなってる?」

棕「よく見てください、演劇部の部室だけじゃないみたいですよ」

よくみると所々学校が変わっている

春原「朝から杏たちが同じクラスだったたり、今日は変なことばかり

だね」

朋也「春原…お前思い出したか？」

春原「よく考えたら違うクラスだつたことに気づいた」

渚「とにかく原因を調べましょ」

その必要はないぜ

振り向くとそこには転校生、棗恭介が立っていた

朋也「どうしてことだ？転校生」

恭介「棗恭介だ、恭介でいい、とにかくそつちの方も自己紹介から頼む」

俺たちは各自自己紹介をした

そして恭介から聞いた話は現実に起こりうらないような内容だったことみがなんだかとても嬉しそうだった

鈴「なんだ恭介緊急収集つて？」

恭介「協力者だ、こいつらはこの世界の住民だ」

とりあえずは互いに自己紹介をする

恭介の調べによると僕らの世界と、岡崎さんの世界に歪みができる世界の一部が混ざりその一部の人間が巻き込まれた世界、つまり歪みを直せば世界はもとに戻る…と言うことだった
衝突した僕たちの世界は一部でしか原形がなかつた

歪みの改善は恐らく互いの世界に存在しなかつたものを見つけること

僕と恭介、鈴、岡崎さん古河さんのグループと

真人、健吾、春原さん藤林さん一之瀬さんのグループに別れて探索を開始した

真人組

棕「それにしても信じられませんね、他の世界があつたなんて」

「…」とみ「私は信じてたの、お父さんとお母さんの研究が実現したの、
とってもうれしいの」

杏「…」とみが驚かないのは納得だけど、なんで真人と謙吾もあまり
どうしようしてないの？」

真人「それは俺が筋肉だからだな」

謙吾「まあこのバカはほつといて俺たちはこんな体験が初めてじや
ないからな」

春原「へ～なんかかっこいいな～」しばらく歩き続けるんだが、結
局見つからなかつたわけだ、

真人「ほんとにあんのか？」

椋「恭介さんが嘘をついてるとは思えませんし…」

謙吾「あの恭介の言つたことだ偽りはあるまい」

真人「は…俺は今天才的なアイディアが浮かんだ」

春原「なんだよ井ノ原？」

真人「この学校の壁を片つ端から壊したら見つかるんじゃね？」

春原「おっ！ナイスアイディア？」

謙吾「何を言い出すのかと思つたら…」

杏「それに同意する陽平もね…」

謙吾＆杏「アホだ…」

真人＆春原「うおおお？ダブルで言われたからなんかダメージ大き
くなつてる？」

ことみ「類は友を呼ぶ…なの」

椋「私たちの方は何もなかつたので恭介さんたちと合流しませんか
？」

謙吾「うむ、それが妥当だな」

恭介組

恭介「どうだ岡崎なにか見覚えの無いものはあるか？」

朋也「これといって何もないな」

理樹「作られた世界じゃないからマスターって訳でもないよね」

恭介「その可能性は0に等しいな」

鈴「恭介たちが何を話しているかよくわからんのだが」

渚「私もあまりわかりません？？」

恭介「まあとにかく歪みを見つけるとしようか」

探し続けて約30分

鈴「なんだあれ」

鈴が指差す方には、丸い…だんご？

渚「あれはだんご大家族です、この世界では普通にいます」

鈴「そーなのか？」

鈴が岡崎さんの方を見て聞いた

朋也「そんなわけあるか！」

理樹「あ…逃げた」

恭介「追うぞ！！」

だんごは思いの外速い…

朋也「渚！だんご大家族は足が速いのか！？」

渚「わ、わかりません？」

理樹「このままじゃ見失いそうだよ！」

だんごの前に巨体が2つ立ちはだかつた

真人組のメンバーと合流したようだ

真人「なんだ？この得体の知れないのは？」

謙吾「恭介？こいつがこの世界の歪みか？」

恭介「ああそうだ！！頼む」

真人＆謙吾「わかつた！！」

と、だんごに向かつて飛びかかるうとしたとき

渚「やめてください？」

朋也「渚？」

渚「だんごは大家族なんです？一人かけてもダメなんです？だからだんごをいじめるのはやめてください？」

恭介「しかし、こいつをどうにかしないと…」

鈴「恭介、あいつなんか持つてるぞ」

よくみるとなにか光るものを持っている

渚「だんごさん、それを渡してくれませんか？」

だんごは少し戸惑つたが渡してくれた

杏「鍵？」

椋「演劇部部室つて書いてますね」春原「つてかいつのまにか僕ら

部室の前にいるじゃん」

と春原が鍵を開けたとたん

春原「のわああああ？」

理樹「うわあ……」

鈴「大量のだんごだな」

だんごは嬉しそうに大量のだんごのもとに駆け寄つて消えた

すると…

朋也「いつもの学校だ…」

恭介「戻つたのか？」

杏「みたいね…」

歪みは修正されたが僕たちはまだ残っている、

真人「どういうこつた？ 戻れねえぞ？」

謙吾「戻る方法は別：ということか

すると不意に僕の携帯が鳴り始めた

小毬「あ、やつと繫がったよ、ゆいちゃん、繫がったよ」

理樹「小毬さん？」

恭介「どういうことだ理樹？」

理樹「ちょっと待つて、テレビ電話に切り替える」

来ヶ谷「ハツハツハ久しぶりだな諸君」

真人「そういうのはいいから早く用件を頼むぜ……」

来ヶ谷「む、すまないこっちの世界からの干渉が許されなかつたの

か、今まで連絡不可でな」

謙吾「しかし連絡可能となつたと言つことは、なにか干渉できるの

だろう？」

来ヶ谷「うむ、さう言つことだ、そこから出るにはその部屋の中に

入ることだ」

真人「なんだ簡単じゃねえか

と真人が入り、消えた

来ヶ谷「少年真人は人の話を最後まで聞かないな、続きたが、一度

そこから出たら一度と戻れん、別れの挨拶くらいしてこい」

理樹「ありがとう来ヶ谷さん」

朋也「いつちまうのか？」

恭介「ああ、みんなが待つてる」

渚「できれば演劇部に入つてほしかつたです」

鈴「悪いが私はそういうの怖い」

渚「即答されちゃいました……」

春原「井ノ原に伝えてよ……気が合ひそなバカだつたつて

真人「お前もな」

電話越しに真人が言う

理樹「短い間だつたけどありがとう」

杏「夢なんじやないかつて今でも思つてゐるわ

棕「でも、紛れもない現実なんですよね」
謙吾「そうだ、またいつか会えると良いな」

ことみ「さつと会えるの」

恭介「さて、名残は残きないがそろそろいくか

朋也「元気でな」

恭介「おう、あばよ」

別れ際みんなが手をふつて送ってくれた
こんな世界もあつたんだな

みんないい人だつたな、短い間の思いで忘れないよ

気がつくと僕らはもとの世界に戻つていた
寮のベッドで寝ていたからほんとに夢じやないかと疑つた、でも、
夢じやないよね
またいつか…さつと僕ら会えるよね
さつと会えるを

THE END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6262z/>

リトルバスターズ×CLANNAD

2011年12月20日23時36分発行